

についての調査を従来から行ってきた。長櫃などに収められている多量の未整理の文書が存在するが、その調査には長期間要すると思われるので、古文書については戦前に荻野三七彦氏により整理され、それに基づいて成巻されたり、冊子本として修理されたりした古文書群の目録を作成し、『法隆寺の至宝 8 古記録古文書』として刊行された今回の資財帳に古文書目録として収録した。その他に南都では、現在県教委が行っている県下の中国や朝鮮の版経や文化庁の東大寺修二月会資料の調査に参加した。その他文化庁、教育委員会、寺などが行った京都醍醐寺聖教、京都冷泉家典籍文書、京都東福寺文書、京都仁和寺聖教、滋賀石山寺聖教、東京国立博物館法隆寺献納宝物などに参加協力している。ここ数年、調査に参加協力してきた滋賀永源寺文書、京都興聖寺一切経、奈良西大寺元版一切経の調査は終了し、それぞれ教委などで報告書が刊行された。

上記の調査のうち仁和寺は、奈文研で1950年代から調査を行っており、その成果として御経蔵・塔中蔵聖教、塔中蔵階下書籍について罫紙の目録を作成している。現在、御経蔵につき、その目録を再確認したものを作成中である。古文書料紙関係の調査では、共同研究グループとともに、今年度は和紙製作の現地（京都黒谷、高知伊野）に行き和紙製作工程を実見した。そこで原本調査でデータとして収集している簀目、糸目、刷毛目、板目など料紙に残っている痕跡と工程、料紙の表裏などとの関係を確認した。また漉返紙をいろいろな条件で製作し、古文書現物の宿紙などとの色調の比較などの調査を行った。これらと和紙製作の工程で実見しての認識を古文書調査において古文書の原本で再確認したいと考えている。

（綾村 宏）

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターにある6研究室と情報資料室、および各研究員がそれぞれの課題を定めて進めている研究があり、多くは前年から継続しているものである。1998年度には次のものがある。これらのうち、いくつかについてその内容を紹介しよう。

縄文編年の学史的・研究/古代地方末端官衙遺跡の研究/古代豪族居館遺跡の研究/動物遺存体による生業活動の復元的研究/遺跡土壌の微細形態

学的研究/年輪による古気候の復元的研究/年輪年代法による白頭山巨大噴火年代の解明/広域遺構探査法の開発研究/東アジア古代の庭園遺構の比較研究/常時微動測定による古建築の構造に関する研究/木・石造文化財の経年変化に関する研究/有機質遺物の材質分析とその保存処理法の開発研究/劣化写真のデジタル画像による復元/全国不動産文化財情報システムの普及流通に関する研究/文化財情報ネットワークにおける通信法の研究/遺跡地図情報システムの開発研究/南アジア仏教遺跡の研究/唐代壁画の技法的研究/陶磁器文化の交流に関する科学的研究/日韓古代における埋葬法の比較研究

埋蔵文化財関係情報処理の現状 奈文研ホームページに対するアクセスは、1ヶ月2000件を越えるところまで増加してきている。一般からの関心の高まりに対応できるよう調査部から発掘調査速報のデータをいただき、すみやかな掲載に努めている。所内向けのデータベースについても、インターネット対応への準備を進めている。出土木製品のデータベースなどについては利用できるようになっている。

全国不動産文化財情報システムの現状 近年、発掘調査報告書は内容の要約にあたる抄録を備えるようになってきている。整備を進めている遺跡データベースにこのデータを盛り込む作業を開始し、1995年度分より順次入力作業を進めている。その他、種々の遺跡地名表や遺構・遺物の一覧からもデータの入力を行っており、有益な情報の蓄積を図っている。

年輪年代法による八ヶ岳大崩壊の年代解明 長野県北部を流れる千曲川流域には、砂層に覆われた平安時代の遺跡がいくつも確認されている。この砂層は、「仁和四年」の八ヶ岳（稲子岳）大崩壊によって発生した泥流が千曲川に流入し、下流域まで氾濫したものだとして推測されている。実際、現地を調査すると千曲川沿いの各所でヒノキやスギの埋没樹幹を発見することができる。目下、河内普平教授（信州大学教育学部）と共同で年輪年代法に好適なサンプルを探索し、暦年代確定に向けての研究を進めており、遠からずその年代は明らかになるであろう。

金属製遺物の保存科学的研究 金属製遺物における金鍍金の色調を定量化するための基礎実験をはじめた。鍍金層は各種の要因が影響して微妙に色調が変化することが知られている。今回は予備実験として双六古墳から出土した馬具類のクリーニングを終了した遺物などを用いて、分光測色計による反射スペクトルのデータを収集した。その結果、分光スペクトルの特性にはあまり変化がみられないものの反射率にその差が認められた。（工楽善通）